VII. 徳島大学医学図書館

— 図書館新築の初期のねらい と運営上の問題点について —

沖 田 学*

概 観

沿革・目的一昭和30年、当学に大学院が設置され、四国における唯一のA級大学となったものの、建物・施設の面においては、半世紀前の老朽兵舎の転用が続いていた。医学部では、火災の点から病院や研究室を不燃性化することが焦ひの急であったが、図書館側としては、大学における教育と研究の根源である図書館の耐火性建築を、まず第一に取り上げるべきことを具申した。

幸いにも、昭和34年に医学部創立15周年を迎えるところから、この新図書館建設が記念事業として採択され、医学部・薬学部全職員（看護婦、作業員も含む）の協力のもとに、2カ年にわたる募金を実施した。

この学内の募金活動から出発して、卒業生や父兄会はもちろん、地元の県・市ならびに医師会・歯科医師会関係にも働きかけ、昭和34年1月20日、医学部内に徳島大学医学図書館建設期成同盟会が結成されたのである。そして医学部構内に鉄筋3階建（一部4階）延720坪の医学部・薬学部共通の近代的医学図書館を建設することになった。

この資金七千万円には、地元が二千万円、文部省二千万円、ロックフェラー財団寄付依頼三千万円を予定した。その後、ロックフェ

ラー財団からの援助が見込薄となり、資金問題その他の事情で再三計画の変更を見たが、遂に昭和36年度に地元の熱意にこたえて、文部省は鉄筋積層4階延200坪の書庫の建設を決めた。

この書庫は昭和37年3月に完成し、引き続いて、全額地元寄付金により、管理室および閲覧室（2階延265坪）が昭和38年2月19日に竣工した。

従って、メディカル・ライブラリーが、ひとり大学のみならず、徳島県民および四国における医学関係者の支援によって建設されたところに、四国における唯一の医学図書館センターとしての意義がある。このようにして出来上がった当館であるから、利用の点においても、直接間接に医学・生物学に関係する学外者にまで開放している。

建築にあたっては、高松工事事務所長、医学部長、図書館長、施設課長、医・薬学図書委員会、図書館員などが中心となって計画が進められた。大綱については、図書館側の意見が取り入れられたが、立地条件等の関係から館側の希望通りに行かない点もあって、運営面で種々の欠陥が見られる。

位置一図書館は、学部の中心に位置するのが最も望ましいことは周知の通りである。幸い、当学部は、旧兵舎そのままの転用など、建物・施設の面において建設途上にある関係

* Manabu OKITA

(第1図) 徳島大学医学部・付属病院 現在配置図

で、敷地の点においては恵まれた環境にある。

また、図書館が学部における二番目の鉄筋建物とあって、関係者の位置に対する関心が非常に深く、学部の将来計画も再三論議をかさねて変更される状態にある。最初は、旧図書館の東側に隣接して、図書館建設が計画されたが、その後、将来計画の基礎教室建物の一部を利用する形になってみたり、いくたびかの変更を経て、昭和34年になって現在地に決定されたものである。(第1図 医学部および病院現在図、第2図 医・薬学部将来計画図、参照)

近い将来、図書館の西側に大講堂、南側に厚生施設の建築が予定されており、さらに、医学部・薬学部・病院の将来計画が完成された暁には、徳島大学の医学部、薬学部を訪問される方は、門を入ると、医学図書館の美しい建物が、いやおうなく目に映じてくることであろう。

建 築—鉄築コンクリート2階建(第3図 図書館平面図参照)。

(総面積) 延 1541.48 m² (466.297 坪)

閲覧室(二階)……432.00 m² (130.68 坪)

事務室その他(一階)447.00 m² (135.217坪)

書庫(積層4層)……662.48 m² (200.40 坪)

(工事費) 計 ¥41,534,000.—

建築工事 { 本屋(2階建)¥20,283,000.—
書庫(4層)……¥ 6,936,700.—
書架工事(鉄製積層式4層)

……………¥ 8,773,600.—

ブック・リフト工事 ……¥ 976,700.—

電気工事 ………………¥ 2,806,055.—

電話通信工事 ………………¥ 448,780.—

給排水及暖房工事 ……¥ 1,187,435.—

瓦斯工事 ………………¥ 47,565.—

火災報知機工事 ……¥ 74,165.—

建 物 各 部

1. 管 理 部 門 (447 m²)

(第2図) 徳島大学医学部・付属病院・薬学部 将来計画配置図

(第3図) 図書館平面図

玄関ホール：利用者は、玄関に入ると、左側に下駄箱や傘立があり、必ず履物をスリッパに履きかえて、受付で鍵を受け取り、階段の北西側にあるロッカーに全部持ち物を入れて2階閲覧室に行くようにしている。

ホールは休憩室にする計画であったが、新聞閲覧者のために、壁に面して、新聞を片側5紙ずつ計10紙備え付けている。将来、ソファールを置いて喫煙の場所とする考えである。

なお、利用者の急増に対し、現在、ロッカーが60名分、下駄箱は50名分の準備しかなく、これらの容器を増置すべきスペースに困っている。

事務室（整理室を含めて 74.46 m²）：事務室の広さが、そこで執務する人員および図書館独自の諸要素によって左右されることは当然である。当館では、一応、事務室に配置する人員を最低12名として計画したが、出来てみると非常に狭い。一人当りの広さにも基準がある様で、外国では8~15 m²、日本では6~12 m² であると聞いている。

事務室のスペースに限らず、図書館の独自の諸要素なるものは、事務局や教官になかなか理解されにくいために、図書館側としても大いに苦慮するのである。したがって、図書館建築に際しては、図書館の特殊事情を力説する必要がある。

物置（12.41 m²）：計画では、製本準備および荷造り室にする予定であったが、いざ運営する段になって物品の保管場所に困り、この部屋をふりあてた。物品倉庫は、図書館でも別個に用意した方がよい。

複写室・暗室（30.36 m²）：当初の計画で予想した以上に複写の利用が激増し、ディベロップ2台、トロープ1台、リコピー1台を備え付けることになったため、現在すでに非常な狭あいを感じている。暗室は、最初からマイクロ設備を計画していた関係で、完成

しているが、設備の方を取り付ける場合のスペースの点で今から案じている次第である。

2. 閲 覧 室（432 m²）

学生閲覧室と職員閲覧室とを書架で区切りをつけ、学生閲覧室には、和・洋の学生用指定参考図書、百科事典、辞書類を約3,500冊備え付け、職員閲覧室には、Abstracts や Indexes、各種の reference books を並べた。新刊雑誌展示室は内外の新着雑誌600種を展示している。

一隅には休憩室を特別に設け、新聞、教養雑誌、教養図書を配架して、利用者の憩いの場となっている。これは、神戸医大からヒントを得たもので、デラックスなテーブル、椅子を備えて、冬は湯茶の準備がしてある。館内での喫煙は、この休憩所以外では禁じている。

ただ閲覧室に手洗いがなかったため、利用者はもちろん館員も、一階まで降りて行かねばならない、といった不便さがある。

3. 書 庫（積層4層 662.48 m²）

収容能力12万冊を目標に設計されている。各層165.62 m² で、書庫一階は事務室に、書庫三階は閲覧室へ通じている。一階に入って左側にブック・リフトがある。

書庫一階には、当学部で刊行の紀要類、重複雑誌、製本準備中の雑誌、寄贈受入れ未済の図書、二階は和洋図書、三階が洋雑誌、四階には、和雑誌および外国の Handbook 類が収容されている。

換気装置は、二階と四階に取り付けてあるが、これは各階に付けた方が良いように思われる。

4. そ の 他

◇ 電話は、交換台が別棟の医学部にある関係上、外線直通のものはないが、構内電話機をふやして、館長①、事務主任①、事務室③、複写室①、宿直室①、出納室①、参考司書室①の計9台にした。なお、館員相互間はもち

ろんのこと、利用者から直接館内各室に連絡できるように、10局用の館内電話機を備え付ける予定である。配線工事は、書庫各階およびそれぞれの個所とも、一応終っていて、全部完成すれば、利用者は書庫の中から出納係へ電話で話ができることになる。

出納コーナーに電話とタイプライターが置いてあるので、この騒音が利用者に迷惑を与えているが、今のところ何等の具体的な対策が見当らない。やはり、区切られた一室が、出納手のためにも欲しいものである。

◆ 図書館は読書の場合であるから、暖冷房設備が必須のものであり、図書館側でもこの実現には力を入れた。しかし、暖房設備は配管工事まで完了しているが、冷房は資金の関係で考慮されなかった。最近、ルーム・クーラーが寄贈され、その使用にあたっては多少の工事をせねばならないことになっている。

図書館建設に当っては、最初から冷房も計画に加えるべきで、今後の公共建築物には当然計画されると思われる。しかし、本学の如く、資金の関係等で問題になるところも出て来よう。

◆ 狭い建物を最大限に利用せねばならぬ状態なので、スタッフ・ルームは割愛せざるを得ず、館員の更衣、休憩、話し合いなどに、不便を感じている。これは、ぜひ最初から建築計画に入れて置くべき問題である。

結 び

図書館に限らず、新しく事を始めようとするれば、長い年月と周到なる研究・計画、ち密な資料が必要であることは言うまでもない。とくに図書館においては、建物が新築されると、その外観を見て内容まで充実されているものと思われ勝ちであるが、いかに立派な理想的な図書館が出来ても、これを運営するスタッフの新たな心構えと不断の研究努力とがなければ、新図書館の機能をフルに発揮する

ことはできない。

当医学図書館では、一応建物は完成したもの、内容設備の点では一部閲覧室が完了しただけであり、以後、年次計画によって順次整備される予定になっている。

—私のお願い—

津 崎 孝 道*

私こと、せんだって、日本学術会議会員、東京女子医科大学付属図書館長の吉岡博人教授から、日本学術会議のドキュメンテーション研究連絡委員会の委員になるように、とのお話を頂きました。ドキュメンテーションということについて私は現役時代に不勉強でありましたためきわめておぼろげな概念しかもっておりません。従って、私に果して吉岡館長のご推せんをお受けし得る能力があるかどうか、はなはだ心もとなく存じました。そこで慶応の津田良成氏に相談にのって頂きましたところ、津田さんの「ぜひお引き受けなさい」というお言葉にはげまされまして、委員をお引き受けいたすことにしました。その節、津田さんにも、ドキュメンテーションについてご指導を頂けるようにくれぐれもお願いしておきましたが、幸いに、ドキュメンテーション研究連絡委員会には吉岡館長も委員として出ておられますので、吉岡館長の後に従って、できますことならば、主として医学図書館の立場からのドキュメンテーションに、力を注ぎたいと存じております。日本医学図書館協会の各大学図書館の館員の皆様におかれても、ドキュメンテーションについて、私に御指導をお与え下さいますよう、心からお願い申し上げます。

* Takamichi TSUSAKI

本協会名誉顧問、日歯大教授